

彼を尊敬するの餘り、斯は稱したるものにて、後世マホメットと轉訛するに至りしと云ふ。

マホメット幼にして兩親を喪ひ、親戚コレーイシユ家の家長たる、モターレブの手に養はる。其の家赤貧洗ふが如し。マホメットは、何等組織的の教育を受けしに非らず、幼より唯、荒野に出で、牧羊の業に従へり。されど彼は、其間、廣漠たる天然の風光に接し、自然の教化を感受し、加之當時亞刺比亞には、野蠻の風俗を以て充たされたるにも似ず、毎年一箇月間、山林に隱遁する風習ありて、マホメットは九歳の時より、此の國習を踏襲し、毎年九月を以て、メツカの近傍ヘエラ山中に靜坐し、純潔なる天然と親み、沈思冥想、直に宇宙の神靈に接觸するを得たり。

又彼は十四歳より商隊の群に入り屢、シリア、パレスチナ等に旅行して、異境の風俗に觸れ、多くの風習に接し、且つ猶太教、基督教の思想に親炙するに至れり。當時亞刺比亞國內にも、既に猶太教、基督教の侵入せる有りしが、其の大部は依然たる偶像崇拜なりしなり。

然るに當時亞刺比亞國內には、「ハニフ」と稱する、稍、進歩せる一種の團體あり。ハ